哲學研究　第三百二十五號

誠實と戯れ

――ニイチェ哲學の方法序説その二――

黑田一郎

「假に眞理が女であるとしたら、――何うだらう、」とニイチェは『善惡の彼岸』の序文の冒頭に筆を起しつゝ自ら次の如く答へた。「獨斷論者である限りの總ての哲學者が女を理解し損つたのではあるまいか、彼等がこれまで眞理に近づく時にいつも取るところの重々しい生眞面目さ、不器用な押の强さは、正に女を手に入れることのためにはまづい不手際な手段だつたのではあるまいか、さう疑ふことは根據のないことだらうか。たしかに女は手にはいらなかつたのだ、――そして今日、あらゆる種類の獨斷論が痛ましくも打のめされた恰好でそこに立つてゐるのである。」

我々はこゝで眞理と女といふ興味ある比喩の詮索には立入るまい。それは一方に於てはいはばいかめしき理論と體系とを以て武裝された合理主義哲學との對比の妙を狙つたのであらうし、他方或は女だといふこと自體に意味があるのかもしれない。すなはち『ツァラトゥストラ』に於て生が若き女の比喩に於て語られたと丁度同じやうに。けれども私にとつて問題は、此處でニイチェが過去の總ての哲學をただ獨斷論として一括してしまひ、以て自己の哲學的立場の新しさを對決せんとしたことである。その際彼にとつては、それらの哲學が所謂獨斷的であるか或は批判的であるか懷疑的であるかは何等問ふところではないのである。それら總ての哲學が究極に於ては一つの前提を共有してきた、とニイチェは考へる。すなは

ち、眞理の存在、いひかへれば存在する眞理、といふ前提である。眞理は存在する、いかなる哲學者もそれが懷疑家であつてさへ未だこのことだけは疑はなかつたのである。とすれば「我々は眞理を持たない、」かく確信するだけでその哲學は「いかなる時代の哲學も未だ立たない新らしい立場」に立つことになる。(XI, 159)

若し一つの眞理がどこかに存在するのならば、詳しくいへば、それを認識するにはただ我々がそれに到達しさへすればよい如き一つの眞理が時間を越えてどこかに存在するならば、過去に於ける總ての哲學的營みは結局に於て一體何を意味したことになるだらう。我々は既にとつくに一つの眞理に關して意見が一致してゐなくてはならないはずだ。にも拘はらず、我々の持つた眞理は哲學の數だけ多くあるのだ。といふことは、取も直さず我々は眞理を持たなかつたことに他ならないのではあるまいか。(XVI, 47) ただこのことからだけでも、我々は今日、從來の哲學のあまりに樂天的な出發を思ひ返してみるべき位置に置かれてゐるともいひ得るだらう。

けれども飜つて考へるとき、過去の總ての哲學的營みがかくただ一筋にこの前提、この眞理は存在するといふ前提に繫がれてゐたといふ事實には、誠に容易ならぬものがあつたのでなければならない。いひかへれば、眞理は存在する、この簡單なテーゼには實に人間の並々ならぬ思ひがこめられてゐる、まさしく、人間の思考作用を含めての總ての營みの成立根據がそこにあるのだとも考へられるのである。先づ第一に、それは人間が思考するに際してのなくてかなはぬ前提ではないか。丁度人は水の中でしか泳ぐことができないように、そこに於てしか人は思考することができないのである。從つてそれはいはば人間の思考作用を背後に動かす動力の如きものとしてあらゆる懷疑を越えて存在し、人間のいかなる反省の網にもかゝりようのない、前提以前のものとして、むしろあらゆる哲學をその上に成立たせて來たのだとも考へられる。だがそればかりではない。そこには、いはば人間の生きるといふこと全體の意味がかゝつてゐたとさへもいへるのだ。すなはち、それは生きるといふこと自身の前提に他ならなかつた。何故といふに、この前提そのものに實に人間の生死にかゝる希求が繫がれてゐるからである。眞理は存在する、いひかへると、何らかの意味での不變なるもの、不動なるもの、恒常なるものがある

のだ、こう信じなければ我々は生きてゆくことができないのである。若し我々の生のあらゆる營みがいかなる不變なる對象をも持ち得ず、いかなる恒常なるものをも生み得ないのであるとするならば、我々の生きるといふことと自體が全くの虛無の中に解消してしまはなければならぬだらう。かくては生きるといふことが不可能となるのであつて、換言すれば生きるとは常に何らかの形でこの信仰を確保することに他ならない。眞理は存在するといふことの、實に最も本來的な意味がそこにあつたのでなければならない。いひかへれば、生きてゐるかぎりの總ての人々の悲願がそこにあつたのだともいへるであらう。

けれども、だからといつて哲學がこの前提を許容することは正當であらうか。たとへ眞理の存在が我々の生存の缺くことのできぬ條件であつたとしても、哲學とは本來生の地盤の上のことがらではないはずだ。むしろ哲學するといふことは、生の地平をいつてみれば垂直に貫く方向にしてはじめてあり得ることでなければならない。眞理のために眞理といふことが本來かゝる意味ではなかつたのか。とすれば、哲學はそのそもそもの始源に於て、この最も根源的なる生か眞理かの二者擇一を自己に課することに、その第一歩を求めなければならぬだらう。しかしてその際、たとへその問ひが哲學者自身の生を危ふくするものであり、それへの問ひかけが彼の生の地盤を破壞するかにみえたとしても、その前にたじろぐことは許されないのである。にも拘はらず未だ過去のいかなる哲學者も、眞にこの二者擇一の危機に身を置くことから自己の哲學をはじめたものはなかつたといふのは一體いかなることであるのか。

いふまでもなくそれは明らかである。我々は先きに哲學の最も根源的な始源の立場を、生か眞理かといふ二者擇一の形にまで醇化して考へてみた。けれどもかく追ひつめられた哲學の立場を、我々はなほかつ二者擇一の立場とはいひ得るであらうか。もはやそれはかく呼ぶにはあまりに危機的であり、むしろ絶體絶命と呼ぶにふさはしい。そして事實、ニイチェも指摘したやうに、人は眞理を「生の條件」とみたとき、既に危險なる善惡の彼岸に立つたのである。(Jenseits von Gut und Böse, 4.) この時踏みなれた道は足下に崩れ落ちるだらう。そして虛無の深淵は暗黑の口をそこに開き、人は、その虛無の眞上に何の支へもない己が生を見出すのである。かくの

如きが我々の置かれてゐる立場である。しかも人は、一度びこの虚無の深淵をのぞき見たとき、もはやみざる昔に立歸るいかなる道も絶たれたのである。それは恰もメヅーサの首の如く、見たものを石と化さずにはおかないだらう。だからといつて佇むには危ふく、前への一歩はなほさら危險である。かくの如き危機に立つて、なほ我我に殘されたいかなる道があるといふのであらうか。殘された道はただひとつ、我々はニイチェと共にかく問ひかつ試みるの他はないのである。すなはち、眞理なくしてなほかつ我々の生は可能であるか、と。

我々は眞理を持たない、このニイチェ哲學の確信は、こゝにそれの形成せられる根據を持つたのである。それはいひかへれば、絶對懷疑の立場を確保することともいひ得よう。我々は今や自己の置かれた虚無の危險を自ら意志し掴みとる以外に生きる道を持たないのである。それは意識的な虚無への前進であり積極的なニヒリズムの獲得でもあつた。そしてそれがニイチェの試みんとした方法であつた。すなはちニイチェは、このいはば絶對の懷疑を自らの生死を賭けて生きぬかんとしたのである。そこにのみ未だ誰も歩かぬ唯ひとつの道が殘されてゐた。未だいかなる哲學者もこの懷疑を究極に問ひつめたものはなかつたのである。勿論それは或は永遠に光りをみることなく闇の中に消えゆく道であつたかもわからない。けれども歩ますして人は何を結論する權利があらう。そしてこの歩ますしてといふこと、ただこのことにのみニイチェは自己の懷疑の保證を見たのである。

かくしてニイチェの哲學は何よりも先づ懷疑の哲學となつた。だがそれ故にまた彼の懷疑は、從來の總ての哲學的立場をただその前に獨斷論として對置せしめた如く、あらゆる比較を絶したのである。「總てを疑はねばならぬ、さう人々が思ひ込んでゐてさへ、彼等の最も周到な人も疑はねばならない最も大切な閾でもう疑はうとはしなかつた。」(J. v. Gut und Böse, 2) その閾に立つてはじめてニイチェの懷疑ははじまるのである。それ故にまた彼は自己の懷疑を何よりも先づ勇敢さとして規定しなければならなかつた。それは恰も未知の海に乘出すコロンブスのそれにも例へられ得よう。そして事實彼は屢々自己の認識への意欲を「閉ざされざる地平線への意志」(XIV, 34.) と呼び、或は自分の認識の方法を「未知の海に乘出す舟人の如く」(XIV, 319. XIII, 73.) と

形容したりするのであつて、恐らくその時彼の心にはかのルネサンスの冒險的舟乘りの姿が思ひ描かれてゐたのであらう。それはいはば未知なるものに己れの命をかける男の行く道であつた。「命知らずの男らしさの懷疑」(J. v. G. u. B. 209.) とも彼は呼んだ。

かくして、「未だこの世にあつたためしのない如き不信、ありとあらゆるものに對する不信、それが眞理への唯一の道なのだ、」と語られる。「右の眼は左の眼を信じてはならない。光りは一時は闇と呼ばれなければならない。これがお前達の行かねばならぬ道である。だがその道がお前達を果實みのる樹々や美はしい牧場につれてゆくとは信ずるな。小さな固い粒をお前達はその道の上に見出すだらう。その一粒一粒が眞理なのだ。幾十年の長きにわたつて、お前達はただ餓え死なないだけの爲にいくつかみもの虚僞をむさぼり食はなければならなかつた、たとへ虚僞だとわかつてゐても。だが先きの粒は播かれ埋められなければならないのだ。そして恐らくは……他日收獲の日があるだらう。だが、誰もその日を約束するわけにはゆかないのだ、でなければ彼は狂信家なのである。」(Der Wanderer und sein Schatten, 213.)

そして恐らくは他日收獲の日が……。けれどもその約束はどこにもないのである。ニイチェの哲學はいはばこの「危險な恐らくは」(Jenseits, 1.) に自己の命をかけたといへるだらう。それは懷疑そのものに化した姿でもあつたらうか。「懷疑することだけが、哲學することなのである。」(Fröhliche Wissenschaft, 346.) かくしてこの哲學の前には、ただ冷たい虚無の世界があるだけだ。「何ものも眞ではない、總てが許される、かく自らにいひきかせて、彼はいと冷たき水に我れと自ら飛込んだ。」(Zarathustra, letzter Teil, Der Schatten.)

けれども、眞理は存在する、このテーゼに固執することが獨斷であるならば、眞理は存在しない、このアンティテーゼもそれが固執せられる限り一つの獨斷であることに變りはない。自己の懷疑の道についてさへ懷疑的にしか語ることをしなかつたニイチェが、そのことを知らぬはずはないのである。「謙遜について謙虚に語る人は少く、貞節について純粹に語る人は少く、ピロニズムについて懷疑的に語る人は少い、」とパスカルはパンセに書くがニイチェはその稀なる一人であつたと思ふ。彼は

徹底的な懐疑に生きたが、懐疑に安住したわけではない。「何ものも眞ではない」かく自らにいひ聞かせて冷たき水に我れと自らとび込む彼は、他方水の冷たさをもとび込む我れの姿態をも、冷靜に測定する自分を失つてはゐないのである。それは試驗管を見守る科學者の眼である。ここにニイチェ哲學を特徴づける第二の性格が示される。それは懐疑の哲學であつたが、同時にまた「實驗の哲學」(XVI, 383) である。「私は實驗を許さぬやうな總ての事物、總ての問題について何も聞きたくはない。これが私の眞實感の限界なのだ。何故ならそこに於ては、勇氣がその權利を失つてゐるからである。」(Fröhliche Wissenschaft, 51.)

そしてそこにまた眞の勇氣があるのではなからうか。誠に眼をつぶつて斷崖をとび下りる者を眞の勇者とは誰も思はないのである。一切を否定し一切を破壞し盡した果の眼もくらむ虛無の深淵にとび入るのがニイチェの懐疑であつたとしても、彼の決意はこのすさまじい懐疑の中にあつてあくまで自らの主人として留まるにある。彼は、そこにおける一切の出來事の主裁者であり責任者であらねばならぬ。そこに於ける一切の經驗の價値決定者でなければならぬ。彼の絶對懐疑は、一切の眞理いひかへれば一切の立場がその根據を失つて崩れおちるかと見えた果の、絶望的自棄ではないのである。寧ろその不信の唯中にあつて、あくまで自由なあくまで自律的な自己の生を確保せんとの決意に滿ち／＼たものである。從つてそれは、一切の所與、一切の既成なるものへのいかなる意味での盲從をも肯んぜず、總てはただ我が眼我が手を以て確かめねばならぬとして、ただ己れが探求の眞摯さの極致にのみその眞實感の最後のよりどころを許容せんとした、純潔きはまる魂のなせる業であつたとも考へられる。それ故彼は一切を未知なる混沌に還元しつゝ、我れと自らを實驗動物としてその懐疑の唯中になげこみ、しかもそこに於ける一切の我が經驗を嚴密なる科學者の眼で看視することを自己に課する。自らを實驗臺に供しつゝしかも他方自己の實驗者として、寸毫のごまかしもしのびこむ餘地のない眞畫の意識と、殘忍なまでの冷徹さを持ちつゞけることを自己に要求するのである。(vgl. F. W. 319, und Jenseits, 210.)

これが彼の所謂實驗的方法である。それは未だかつて見ざる探求の激しさと眞摯さとを内に藏してゐる。何に

もましてただ眞實を、といふニイチェの激しい眞理への情熱がそこに火と燃えてゐるを我々は感ずるのである。けれども、かくの如き眞實への意志とは、またかくの如き激しき情熱の果に求められる眞實とは、一體いかなるものであつたのであらうか。我々はその方法の對比を絶した激しさと獨異さとに心奪はれざらんがためにも、今少しくこの懷疑と實驗の二方法を內容的に性格付けなくてはならない。

ニイチェのキリスト教に對する敵意をただ我々の當面の問題からのみみるとき、それは反プラトン主義といふ形に置換へることができるだらう。「キリスト教は民衆のためのプラトン主義である。」(Jenseits, Vorrede.)と彼もいつてゐるし、また「プラトンはギリシヤ人のあらゆる根本本能から非常に迷ひ出してをり、……甚だしく先在的にキリスト教的であると私は思ふ。」(Götzen-Dämmerung, Was ich den Alten verdanke.)とも語つてゐる。更に引用すればニイチェのプラトン理解は次の如くである。「プラトンといふ現象全體を言表はすには、私は他のどんな言葉を使ふよりも寧ろ『高等詐欺』といふ言葉がよいと思ふ、或はその方がお氣に召すのならば、理想主義といつてもかまはない。とにかくこのアテネ人が埃及人に弟子入りしたことに對しては(或は埃及のユダヤ人にか)、人は高い代價を支拂つた。プラトンは、キリスト教といふ大きな宿命の中に於ける理想と呼ばれてゐるあの曖昧さ、あの魅惑なのであつて、それは古代の高貴なる人々に自分自身についての判斷を誤まらせ、『十字架』へ導くところの橋を渡ることを可能にさせたものなのである……。そして、いかに多くのプラトンがいまなほ『教會』といふ概念の中に、すなはち教會の構造の中に、組織の中に、實踐の中にあることだらう。」(ebenda.)

「プラトンは現實の前には一個の臆病者である。だから彼は理想に逃込む。」(ebenda.)要するにこれが彼のプラトンに對する結論なのだ。現實は、若し捉はれない眼を以てみるならば一瞬たりとも留まらない流轉である。我々の正直な感覺が、常にこの現實の不斷の空しき生成を我々に告知してゐるのだ。にも拘はらずこの變轉する現實のきびしさから眼をそらして、それを固定した姿に於て、靜止した存在として捉へ得たときにのみ、現實の

正しい姿があるのだと人は普通考へる。形あるものを形なきものより高しとみ、動かざるものを移ろひゆくものより尊しとし、存在を生成の上位に置くこの思想は、取も直さずエレア主義であり、プラトンはその最大の代表者である。以來、人々は現實への勇氣とそれを凝視する眼を失つた、とニイチェは考へる。

過去のあらゆる哲學に於ける、不當なる感覺の蔑視と理性の讃美がまたそこから出發した。感覺は現實を變化と多樣性とに於て示すが故に、現實の認識に關して我々を欺くものである。それの捉へ得るものは所詮假象の世界にすぎないのであつて、眞實の世界とは、その背後にある不動の永遠なる存在でなければならぬ。こう人々は考へる。かくて他方、生成を存在に、運動を靜止に改竄する能力、すなはち理性が眞理への唯一の道であると考へられたのである。あらゆる哲學に共通する理性なる女神の絕對的權威に對する信仰は、究極に於てこゝにその根據を置くのだ。

ただその際ニイチェは「非常なる敬意を以て、ヘーラクレイトスの名を取除く。ヘーラクレイトスは、その他の哲學者連中が感覺は多樣性と變化とを示すとの理由でその證言を拒否するときに、恰も事物が持續と統一とを持つかの如く感覺が事物を示すとの理由で、それの證言を拒否したからである。」(Götzen=Dämmerung, Die Vernunft in der Philosophie.) ヘーラクレイトスは現實への勇氣を失はなかつた。「存在が空しき虛構であるといふことに於て、ヘーラクレイトスは永久に正しさを保持するであらう、」とニイチェはいふ。けれども「ヘーラクレイトスもまた感覺に不正を行つたのである。感覺はエレア派の人々が信じたやうにも詐らず、ヘーラクレイストの信じたやうにも詐らない、——それは總じて詐らないのである。」(obenda.) これがニイチェの確信であつた。彼はいふ。「論理家は世界が幻であることにしてしまふ。そして、思惟に於てのみ存在への、無制約者への道が與へられるのだと決めてしまふ。だが反對に、私はそれが幻であらうとこの世界で澤山だ。」(XIV, 5) この生成する現實をおいてどこにも眞實の世界はないのだ、とはニイチェが肝に銘じて覺悟したところであつた。

こゝにヘーラクレイトスの血統をひく生成の哲學者ニイチェの立場がある。人は何故、存在するものを生成の上位に置くのか、動かざるものを移ろひゆくものより正

しいと見るのか。要するに人々が、變化とか生成とかを自己の生存の苦惱の原因と感じ、存在するものに於てのみ自己の幸福が保證されると考へたからに他ならない。人は眞實を求める。がそれは「それ自身矛盾しない、欺瞞しない、變化しない一つの世界を、――矛盾とか幻滅とか變化とか――それらの苦惱の原因がそこでは人を苦しめないやうな一つの眞なる世界を求めてゐるのである。……明らかにこの場合眞理への意志とは、恒常なるものの世界への願望に過ぎない。」(Wille zur Macht, 585) それ故正當にはそれは「眞理に對する恐怖、眞理を顚倒せんとする意志、非眞理への意志」(Jenseits, 59.) であつたのである。すなはち彼等にあつて、眞理が恰も人間にとつて美しきものであり確實なものである、人間にとつて希望であり理想である、とまるできまつてでもゐるかのやうなのが、ニイチェには我慢がならないのである。そのやうなところに、どうして探求の誠意さがあり得ただらう。「例へ最高度に有害であり危險であつてもそれが眞理であるかもしれないのだし、それの完全な認識が却つて人を破滅におとし入れるもの、」(Jenseits, 39.) それが眞理であつたとしても人間に抗議する權利はないはずだ。

過去の殆んどの哲學が安住してきた哲學的ドグマに對するニイチェの激しい怒りがそこにあつたのだ。彼の哲學的懷疑は、いはばこの怒りに出發する。過去の哲學に於て、たとへいかに眞理への意志が語られたとしても、この嘔吐の出さうな弱さと甘さを背後にかくしてゐるかぎり、所詮それは手のこんだお芝居であつたにすぎず、或は觀客を煽動ずるためのポーズに過ぎなかつたのだ、とニイチェは考へた。だから彼はまた、所謂「哲學者の殉教、彼の眞理のための犧牲」(Jenseits, 25.) なる掛聲に欺かれるな、と繰返し注意しなければならなかつた。事實、そこにいかなる眞理が提出せられたか。それらはただ彼等に氣に入つたが故の眞理ではなかつたのか。激しき流轉の唯中に置かれた人間が、ただ自分の生存を確保せんために僞造した虛構の現實、それが眞理と呼ばれてゐたのではなかつたか。成程人はそれを信じなければ生きてゆけなかつたのかもしれない。その信仰を放棄することは「生そのものを放棄することであり、生の否定である」(Jenseits, 4.) かもしれない。それならば自分はその破滅の道を行かう。この決意がニイチェの懷疑と

なつた。「懐疑とは、たとへば嘔吐の出さうなものを喰べるよりは餓える方がましだといふことである。權威を伴ふ諸々の思想に我々は嘔吐を催ほすやうになつてしまつた。餓える方がましだ。これは稀な情熱である。そして懐疑とは情熱なのだ。」(XI, 188.) このやうにも語られる。

かくしてニイチェ哲學を貫く方法としては、ただこの破滅への決意をおいて他にはあり得ないのである。だがそのことは、あらゆる虚僞から自己を積極的に區別するいかなる眞理の定立をも拒否した生成の哲學者ニイチェの當然に覺悟しなければならない運命だつたらう。寧ろ彼は更に次の如くにいはなければならないのだ。「眞と僞との間に本質的な區別があるのだ、と我々に無理矢理に思ひ込ませるものは一體何なのだ。假象の間に段階があるのだ、いはば假象のより明るい影とより暗い影が、より明るい音調とより暗い音調とがあるのだ、さう想定するだけで十分ではないのか、」と。(Jenseits, 34.) 從つて彼の哲學に於ては、いかなる特別な眞理への意志も語られたわけではなく、「ただ強き意志と弱き意志とが問題であるにすぎない。」(Jenseits, 21.) 弱き意志は、この流轉の現實を何のよりどころもなく生きることに不安を感じて、一つの眞理、いひかへれば信じられた一つの虚僞に安住の栖を得んとするだらう。ただ強き意志のみ、いかなる眞理にも安住せず、常に生成への勇氣を持ちつづけることができるのである。「一人の者が信念の代りに假定の上を、丁度廣漠たる海の上を航くやうに、どの位遠くゆくことが出來るか、それが力强さの最高の基準である。」(XIII, 54.) 意志の强さとは「人がどれだけ澤山の眞理を我慢したか、もつとはつきりいへば、どの程度に彼が眞理をうすめ、蔽ひかくし、甘くし、鈍くし、ごまかす必要があつたか、によつて計ることができるだらう。」(Jenseits, 39.)

かくしてニイチェの哲學に尙眞理への意志が語られるとすれば、それはもはや何か特定の前方に豫定せられた眞理への意志ではない。ただ何よりも眞實をといふ探求の激しさ、その探求に際しての主體的眞摯さ、ごまかしのなさのみをその命とするのである。それ故また彼の眞理への意志は、何らかの前方に豫定せられた眞なるものによつて方向づけられるのではなく、ただ眞理を追求する彼の意欲の自己自身に對する誠實さ、すなはち甘さの

なさゞまかしのなさのみを基準としなければならないだらう。かくて常に自己自身を看視しつづける眼、いかなる瞬間にも己れを見失ふまいとする心のみが、彼の眞理への意志を正しく方向づけるのである。「汝の眼が認識することを止めなくとも、既に汝の誠實さの止むところ、もう汝の眼は何物をもみてゐない。」(XII, 290.)

けれどもこの時彼の眞理への意志は、いかなる場所にも留り得ぬ無限漂泊への意志とならねばならない。何故なら誠實さといふものは、既にしばしば指摘せられる通り、もうそれでよいといふぎりぎりの極限を持たないからである。といふより、その極限を定める客觀的基準がどこにもなく、結局はその基準をもその人の心、すなはち主觀の誠實さに求めるより外に仕方がないからである。探求の誠實さといふものは、それ故、探求する主體の側の動的な面に於てしかありようがない。探求のある限りに於て、その誠實さへの意欲も存在し得るのであつて、探求の止むところ既に誠實さへの意欲といふものは、從つて誠實といふものは自己の成立する地盤を失つてしまふのである。約言すれば、誠實さといふものは誠實への意欲以外のいかなるものでもあり得ない。

かくして彼の眞理への意志は、あらゆる眞理の否定といふ働きに於てのみ、それが眞理への意志であるといふ權利を主張することができるのだ。それは眞理に到達せざる限りに於てのみ、常に最も眞理に近くあるといふ逆説的性格を本來になつてゐるのである。それ故にこの意志はいかなる眞理に於てもそれを己れの最後の安住の地とはなし得ず、常にそれを越えた向ふに探求の可能性を保留しつづけなければならない。それは常に虛無の危險にさらされつゝ遂に終ることのない漂泊を目指す意志である。探求の途上に見出されるであらうさまざまの眞理をただ假の宿りとしてしか見做さず、常に己れを憩ひなき困苦と放浪に解き放つ限りに於てのみ、ニイチェは探求の誠實さを自己に保留することができたのだ。それは自己にあくまで眠りと休息とを拒否しつづけるといふ、自己自身に對する故意の殘忍さを含むものである。そして誠實さといふものは、それが固執せられる限り常にかかる慘酷さを人に要求するに至るものなのである。何故なら、人は自己の探求の行先に常にかゝる危險を用意しつゝ、その危險の中にふるひたつ探求への意欲と緊張とを意識する限りに於てのみ、己れの誠實さを自分に納得

させることができるからである。それは例へば、良心的といふことに固執するとき、人は遂には自分の良心の痛みを意識する限りに於てしか自己の良心の存在を信ずることができなくなると同様であらう。その時人は、自己の鋭どすぎる良心にいやが上にも針をつき立てるよりしかその存在を自分に納得させるすべてを知らないのである。

「己れ自身に對する慘酷さから、虚無を祈禱の對象とする。」(Jenseits, 55.) これが、あくまでも己が探求の誠實さを守り通さうとしたニイチェに殘された最後の道であつた。彼は誠實を「我々に殘されたただひとつの德」(Jenseits, 227.) と呼ぶ。しかして誠實であるとは、彼にあつては殘忍であることの謂に他ならない。「人は殘忍さについて學び直し、眼を開くべきだ。」「認識家でさへ、彼が自分の精神の傾向に反し更には自分の心の願ひに反してさへも認識することを自分の精神に強ひるならば、——即ち彼が肯定し愛し禮拜したいと思ふところで否をいふべく——强制するならば、彼は殘忍性の藝術家として振舞つてゐるのだ。すべて物を深く根本的に把捉しようとすることが、既に、外觀へ皮相へと走りがちである精神の根本意志に加へられる暴行であり故意の傷害なのである、既にあらゆる認識意欲の中には一滴の殘忍性がある。」「自分の苦惱、自分自身を苦惱せしめることにも豐富な豐富すぎる享樂があるものだ。」(Jenseits, 229.)

だがニイチェの誠實は、既に强奪せられた誠實さである。「殘忍性の崇拜」といふ彼特有の方式も、實に誠實を强奪せんがための彼の設けるからくりに他ならない。すなはち彼の固執する誠實さの極まるところ、彼は常に一方に於て渾身の探求に己が命を捧げつゝ、しかもその途上に到達されるいかなる思想も決して己が最後のよりどころに非ずと自分自身にいひきかせる今一つの自己を確保せんがために、己が命をかけた探求の前方に、絶えず虚無の可能性を用意しつづけるのである。一つの眞理の信仰の中に決して己が探求の誠實さを見失ふまいと思ふが故に、ただ虚無のみをひたすらに崇拜しつゝ、自己自身に對する殘虐さを己が探求の命と覺悟するのである。それは一方に於ては生命の危險をも賭したひたむきの探求であり乍ら、しかも他方それをも一つの試み、一つの實驗としてみる眼を斷じて失ふまいとする、意識の二重

性を故意に生きることに他ならぬ。それは一方に於て眞劍の勝負であり乍ら、しかも同時にそこに於てなほ遊びとしての自在の心を失ふまいとする「惡しき戲れを戲れる」(Jenseits, 205.) ものともいひ得よう。これが彼の「實驗哲學」の性格であつた。すなはち實驗といふことは、行爲する自己が同時に意識する自己でなければならないといふ、恰も生身を二つに引裂く如き苛酷なる要求をその最も本來的な意味に於ては持つてゐるのであつて、その二つの極端、最も激しき行爲と最も明るき意識とを同時にその究極にまで追求することによつて、却つてそれを一つのものに統一するといふこと、そこにニイチェの哲學方法を貫く彼の覺悟があつたのだともいひ得るであらう。

けれどもそれはいかにして可能であらうか。ニイチェのあまりに激しい眞理への情熱は、むしろ却つて彼を常に眞理の反對側に釘付けするかの如き哲學方法を彼に課したかとも思はれるのである。眞理をあまりに尊重するが故に、却つて彼は眞理からいつも逃げ廻らねばならぬ運命を自ら選びとつたとでもいふのであらうか。事實彼はかくもいつてゐるのだ。「脫皮し得ない蛇は死す、」(Morgenröthe, 573.) と。一つの眞理に、或は一つの思想體系に閉ぢこもるにはあまりに多くの豐かな生を彼は生きんと欲したに相違ないのだ。例へそれが廣漠たる不毛の曠野ののたれ死に終らうと、或は水また水の未知の航路の果は難破よりない運命が彼を待ちうけてゐようとも、小つぽけな「認識の家」(XIII, 54.) に安穩無事な生涯をおくるよりは、より多くの意義と幸福とを彼は見たのであらう。一つの眞理よりは千の誤謬を、とはまたニイチェの屢々もらした念願であつた。例へばこうもいつてゐる。「一體、何らかの安定せるものは全て動搖するものより本當により幸福なのだらうか。不變なるものは實際に必ず變化するものより價値豐かなのだらうか。若し一人の者が千度矛盾し、さまざまの道を行き、さまざまの假面をかぶり、しかして自己自身の裡にいかなる終結をも、最後の地平線をも見出せなかつたとしても、そのやうな者が、ただの一度きりで自分の場所におさまつてしまつた有德のストイケルより、より少ししか眞理を經驗しなかつたなどとは到底考へられないのである。」(XIII, 34.)

けれどもかくの如き意欲は、もはや單に誠實への意欲なる概念で理解し盡さるべきものではあるまい。彼は、常に自己の上に君臨して彼を未知なるものにかり立ててゆく所謂デモーニッシュなる意欲を感じたのである。それは、常に自ら自己自身の主人としてあり、他の何ものにも命令されない全き自主獨立に於て自己の生涯を生きぬかんとした意欲である。自己規定の喜びと力のみが彼の生甲斐であつたと思はれる。それ故彼はただ未知なるものにのみ自己の血緣を感じた。總ての既知なるもの、總ての所與が、ただ所與なるが故に彼の憎惡の對象とならねばならなかつた。與へられたるものが、ただ與へられたといふことの故に拒否せられねばならなかつた。恐らくそこに、彼の如き創造に憑かれた魂の祕密があるのだらう。彼は自らの力により獲得したもの、自ら創造したものにしか價値を認めない。彼を嫌惡させるのは、恐らく所與性なる性格に本質的に附隨する安易さなのだらう。所與なるものは、それが社會であれ因習であれ傳統であれ學說であれ、現在するものとして常に何らかの權威を伴ふ。それへの追隨は常に人に小さな平和と安心とを保證してくれるのである。けれども、自己規定の意欲に生きる高貴なる魂にとつて、その安易ななまぬるさは到底我慢のならないものと感ぜられる。小人はそこにぬくぬくと安住するがよからう。だが命令することの喜びをしか知らぬものにとつて、それは殆んど死に等しい。常に未知の困難と冒險とが彼をいざなふのである。かくて永遠に憩ひなき漂泊がニイチェの宿命となつた。否、彼はかゝる宿命を自ら選び取つたのである。けれども、彼は一體どこへ行かうとするのか。さうだ。「どこへ彼は行かうと欲したのか。」(vgl. Morgenröthe, letzter Aphorismus.) この問ひを、やつぱり我々はニイチェに向つても問はなければならないだらう。

いひかへれば、ニイチェは生成の肯定者として出發したけれども、生成の立場に立ちきるといふことは所詮は不可能なのであつて、そこに何らかの意味での存在の立場が豫想されてゐなければならず、更に一歩進んでいへば、前途にいかなる目的設定をも許さぬ彼の哲學方法の、一見全く實りなき無限の漂泊を實に背後にあつて支へる力こそ、我々の本當に理解しなければならぬものではなからうか。(未完)